

J R東海道線二川駅の西方の小高い岩山（標高 106.4m）の上に岩屋観音像が立っています。この岩山は秩父帯のチャートと混在岩からできています。

岩屋観音付近の地質は、愛知県東部から静岡県西部にかけて分布する秩父帯の雲谷ユニットと呼ばれるチャートと混在岩からできています（図 1）。この地域の秩父帯は構造的上位（古い方）から、石巻山ユニット、嵩山ユニット、多米ユニット、雲谷ユニットに分けられており、ジュラ紀の海洋プレート沈み込みによって形成された付加体の一部を構成しています。前者3つがかつての井伊谷層で、雲谷ユニットが都田層に当たります。一般的な走向は東北東－西南西方向で、大部分は北に中－高角度で傾斜しています。

チャートは美濃帯と同じく層状チャートですが、黄褐色のものが多く、暗青灰色、灰色ないし淡灰色、白色のチャートも見られます（図3・図4）。渥美半島に見られるチャートの多くも白色～黄褐色です。一枚のチャート層の厚さも、犬山付近で見られる美濃帯のチャートより厚いものが多いようです。チャートからペルム紀～ジュラ紀の、珪質泥岩からジュラ紀の、泥岩から中期ジュラ紀の放散虫化石が見つかっています。

混在岩は泥質岩石（基質）の中に、チャート（多い）、珪質泥岩、砂岩などの岩塊が含まれています。混在岩は一般的にチャートの岩体に伴われるようです。

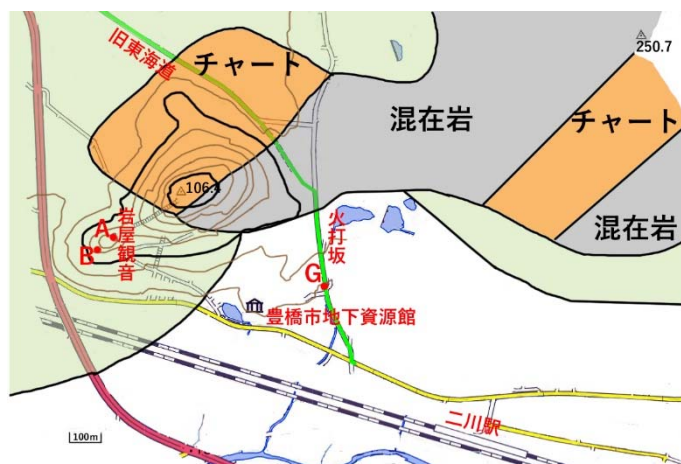


図 1 岩屋観音周辺地質図

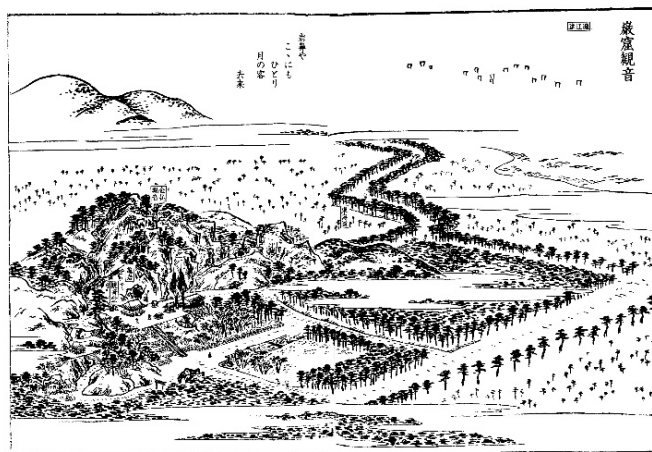


図 2 江戸のころの様子（東海道名所図会，2001）



図3 チャート（暗青灰色）

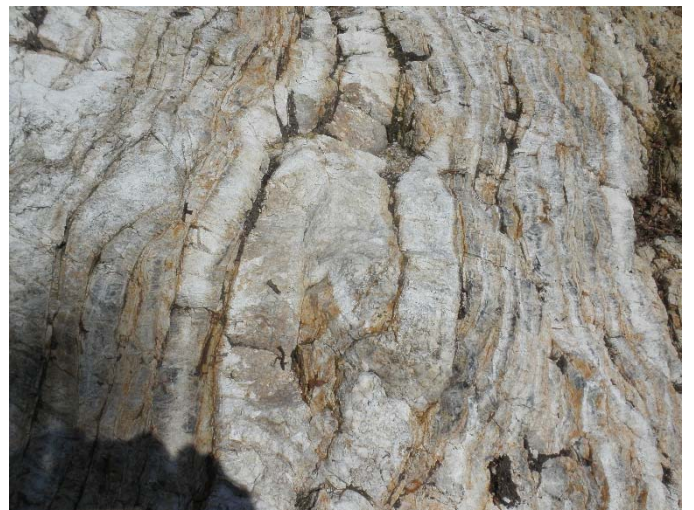


図4 チャート（白色～淡黄色）

観音立像はチャートからなる岩山の上に立ち、土台もチャートの大きな岩塊です（図5）。岩屋の名の「穴」は観音像の立つ岩山の南側の下方に見られ、断崖に大きな岩窟が空いています。底の幅 10m、頂点まで 10m程度の三角形をしており、奥行きは数m程です。奥の壁の右上から左下に 3mほどの幅を持ったほぼ平行な 2 本の断層が見られます（図 6）。

観音立像は明和 2 年(1765)に建立されましたが、太平洋戦争中に供出されてしまい、現在のものは昭和 25 年(1950)に再建されたものです。

このあたり一帯は岩屋緑地と呼ばれ、観音立像の小山の東方には駐車場やトイレが、さらに、その東側には豊橋市地下資源館が隣接しています。地下資源館は無料で、紀州鉱山など、鉱山一般的な展示が多く、豊橋地域特有のもの（高師小僧など）はかなり減ってしまった印象です。



図5 観音立像の土台のチャート（A 地点）



図6 下部の岩窟で見られる 2 本の平行な断層（B 地点）

地下資源館の東側をほぼ南北～北西に旧東海道が走っており、特にこの付近は火打坂^{ひうちざか}と呼ばれています（図 7、図 8）。火打坂は二川宿と吉田宿の間にあります。この地域で豊富に火打石（チャート）が採れたことが名称の由来となっています。昔は松明^{たいまつ}をかざした追剥が出た様な地域だったようです。坂の途中の道端に”尉^{じょう}と姥石^{うばいし}”と呼ばれた 2 つの大石があったと記録されています。



図7 火打石を拾っている様子（東街便覧図略，2019）



図8 現在の火打坂

岩屋観音立像付近からは豊橋市街が遠望できます。



図9 岩山の上から豊橋市街地の遠望→

参考文献

- 秋里籬島／原著 粕谷宏紀／監修，2001，東海道名所図会 中 新訂 尾張・三河・遠江・駿河編，ペリカン社。
 高力種信（名古屋市博物館 編），2019，東街便覧図略 巻1（改訂版），猿猴庵の本。
 村松憲一，2019，愛知県の地質とジオサイト，189 p。
 中島 礼・堀 常東・宮崎一博・西岡芳晴，2008，豊橋及び田原地域の地質.地域地質研究報告（5万分の1地質図幅，産総研地質調査総合センター，113 p。

【村松憲一】